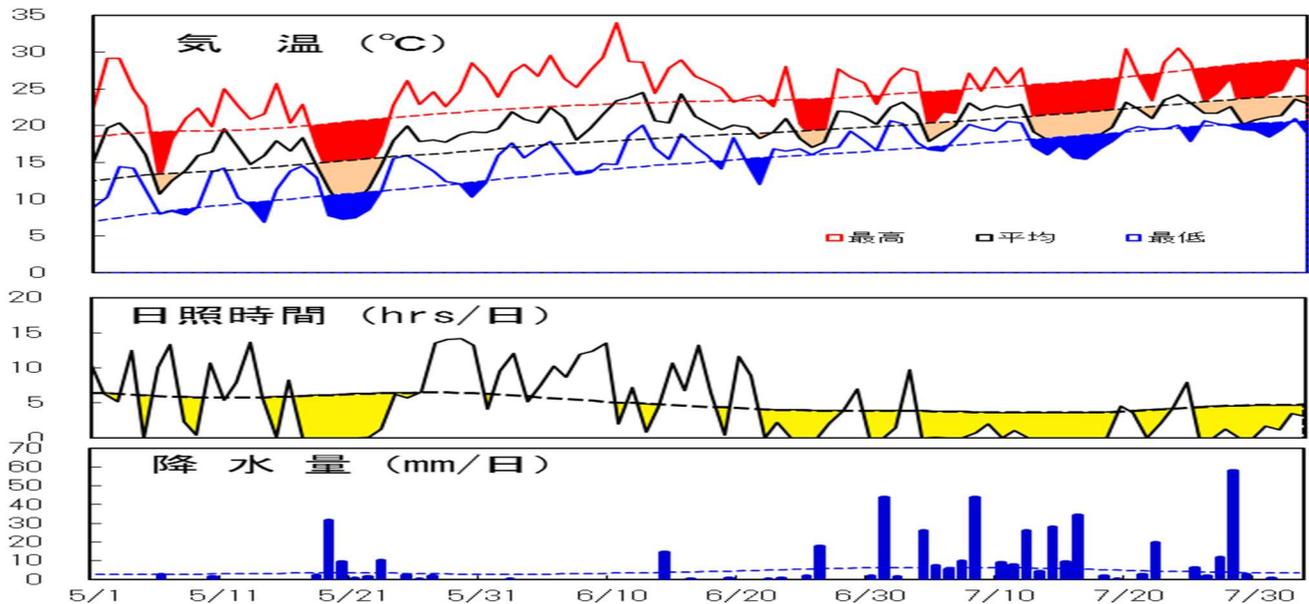


7月低温・寡照・長雨で排水不良, 生育量不足か? 早めの排水対策を!!

1 気象経過

(アメダス:古川)



- ・ 6月: 高温・多照・寡雨で圃場は乾燥気味に経過した・7月は, 低温寡照多雨となった。
- ・ 7月上旬: 平均気温は, 21.5℃(平年差+1.0℃), 日照時間は平年の37%と寡照, 降水量は252%と多雨
- ・ 7月中旬: 平均気温は, 平年差-2.0℃, 日照時間は平年比26%と寡照, 降水量は189%と多雨
- ・ 7月下旬: 平均気温は, 平年差-1.5℃, 日照時間は平年比37%と寡照, 降水量は225%と多雨

2 生育状況

(1) 古川農業試験場 (7月6日, 7月25日)

- ・ 適期に播種された好条件の圃場では, 播種前に降雨が続いたため, 出芽日数は6~7日で, 平年及び前年より1日程度早く, 出芽揃いは良好であった。
- ・ 現地では, 6月に入って播種された圃場が多く, 播種後の乾燥により, 発芽揃いは良くなかった。

〔7月6日〕

- ・ 主茎長: 前年及び平年より長く, 3品種平均で26cmであった。
- ・ 主茎節数: 前年より多く, 平年並みであり, 平均で8節/本となっている。
- ・ 分枝数: いずれの品種とも平年より少なく, 平均で0.2本/本となっている。
- ・ 総節数: 分枝数と同様の傾向であり, 平均で9.5節/本となっている。

〔7月25日〕

- ・ 茎長: いずれの品種とも茎長は長く, 3品種平均で74cmとなっている。
- ・ 主茎節数: 前回同様の傾向であり, 平均で14.4節/本となっている。
- ・ 分枝数, 総節数: 前回同様で平年比で分枝・総節数とも少ない。

〔出芽状況〕

品種名	播種期 (月/日)	出芽期 (月/日)	出芽日数		
			本年	前年差	平年差
タンレイ	5/26	6/1	6日	1日早い	1日早い
タチナガハ	5/26	6/2	7日	1日早い	1日早い
ミヤギシロメ	5/26	6/2	7日	同日	同日

7月6日調査結果

5.26播種

品種	茎長(cm)			主茎節数(節/本)			分枝数(本/本)			総節数(節/本)		
	本年	前年差	平年差	本年	前年差	平年差	本年	前年差	平年差	本年	前年差	平年差
タンレイ	26	1	▲2	8.1	0.1	▲0.1	0.3	▲0.1	▲0.9	10.1	▲0.2	▲1.8
タチナガハ	24	4	1	7.7	0.6	▲0.1	0	0	▲0.6	8.6	1.3	▲1.6
ミヤギシロメ	29	4	2	8.2	0.6	0.1	0.2	0.2	▲0.5	9.8	0.8	▲0.9
平均	26	3.0	0.3	8.0	0.4	0.0	0.2	0.0	▲0.7	9.5	0.6	▲1.4

7月25日調査結果

5.26播種

品種	茎長(cm)			主茎節数(節/本)			分枝数(本/本)			総節数(節/本)		
	本年	前年差	平年差	本年	前年差	平年差	本年	前年差	平年差	本年	前年差	平年差
タンレイ	71	7	3	14.2	0.5	▲0.2	2.8	0.4	▲0.2	29	2	▲2
タチナガハ	73	15	11	14.7	1.7	0.5	2.1	▲0.2	▲0.9	26	4	▲3
ミヤギシロメ	77	11	6	14.2	1.4	▲0.2	2.8	0.2	▲0.1	27	3	▲3
平均	74	11.0	6.7	14.4	1.2	0.0	2.6	0.1	▲0.4	27.3	3.0	▲2.7

※長雨により、ほとんどが排水不良となっており、葉が黄化している圃場や中耕培土の遅れている圃場が多数みられる。

3 今後の管理

(1) 排水対策

- ・長雨によって葉の黄化や根腐れ等の湿害が見られるし、立枯性病害などの発生も懸念される。
- ・明渠の補修等を行い、できるだけ早く圃場の停滞水を排出し、根の健全化に努める。
- ・湿害からの回復を早めるため、停滞水を排出した上で、速効性肥料を窒素成分で3kg/10a程度施用する。
- ・まもなく開花期を迎えるが、湿害を受けると生育が停滞し、着莢数が少なくなることが懸念される。

(2) 雑草対策

- ・連続的な降雨により、機械作業ができず、中耕培土が遅れて、雑草の発生が目立つ圃場が多くある。
- ・機械作業可能な状況となった圃場からできるだけ早く、除草剤散布・中耕培土を実施する。
- ・気象の影響により、湿害や生育停滞が広域的に見られる状況となっている。
- ・麦作後の大豆圃場では、播種できなかった圃場も見受けられる。

(3) 病虫害防除

- ・病虫害（紫斑病、マメシクイガ等）防除を徹底し、収量・品質の向上を図る。
- ・圃場を良く見回り、開花期を確実に把握し、適期を逃さないように防除する。
- ・茎葉が繁茂している圃場では、莢まで薬剤が十分付着するよう丁寧に散布する。

① 紫斑病

- ・雨の多い年に発生が多く、品質に対する影響が大きいので開花期25日～40日後に薬剤散布を行う。

② マメシクイガ

- ・連作によりマメシクイガの密度が高まるため、連作圃場では十分注意する。

〔紫斑粒〕



〔アツバシクイガ被害粒〕



〔マメシクイガ〕



〔ダイズサヤマバエ〕

